守りたいお米と景色

下館南中学校 一年 安達 唯七

「朝はお米をし、かり食べる」

これは、私の朝のルーティーンです。時々お母さんが、「ごはんを炊くのを忘れて、朝食がパンの時は、私も、私のお腹も不満だらけです。すぐにお腹はグウー」と音をたて、勉強に集中できなくなりそうです。給食前に体育がある時は、お腹が空きすぎて、へ口へ口になってしまいます。中学生になって、頭と体をさらに使うようになつてから特にお米のパワーを実感します。

私の通つていた小学校では、毎年、学校の前にある田んぼを借りて、田植え、稲刈りを体験できる授業がありました。私は、田植え、稲刈りの経験は全くなく、この体験授業でのほんの少しの時間だけで済んだが、田植えは、どろに足かたられて一歩前に出る事も大変で、中腰での作業は、体力を使います。成長した稲を刈り取るのも、腕が痛くなつたの思い

出します。お米は、田植え、稲刈りの二つの作業だけでは出来ません。今は、機械化へと技術が発達し、米作りの便利性が上がって、いと聞きまますか、天候にも左右され、虫などに喰われないよう気をつかい、大切に育てられるお米は、機械では解決出来ない、人の手が必要不可欠で、農家さんにとって重労働であると感じました。

私の家の前は、田んぼです。今は、昔々とした稲刈りと背筋を伸ばして、暑さにも負けません。堂々としています。この勇ましい姿の稲は、秋になると、だんだん稲の穂が付き始め、頭を垂さうに、下を向いてきます。美味しいお米が出来るまであと少しです。黄金色にするしり実った稲穂になってくると、いよいよ稲刈りです。稲刈りが始まったなあと思うと、いつの間にか田んぼがスッキリとしていて、少し寂しげな田んぼの姿に変わります。そして、私達の食卓に、新米が並びます。食欲の秋と言われるのは、この美味しいお米が

あつてからこそ言葉ではないでしょうか。
冬になると一旦役目を終えた田んぼが、ゆっ
くりと休けいに入ります。

「今年も美味しいお米をありがとうございます。」

そう伝えたくなるような景色に変わります。

雪が降ると、うっすらお化粧をしたような田
んぼになり、とってもきれいです。春から夏
にかけては、田んぼに水が入り、水が入ると
毎年恒例のカエルの大合唱が始まります。少
し気持ちが悪いくらいたくさんのカエルの声

ですか、我が家の風物詩であり、これを聞く
と、

「あつ、また田植えの季節だな」

と感じることか出来るのです。

一年を通して、目の前で田んぼの様子や、

農家さんの仕事を見てみると、一粒一粒が

とっても大切で、こんなに毎日美味しいお米

を食べられるのも、自然の力と、その自然に

配りよし自然の力を最大限に生かしなから

お米を育ててくれている農家さんのおかげで

あるということ強く感じます。毎日私達
が何気なく食べているお米は、決して
「あたりまえ」

ではありません。農家さんの大変さや苦勞を
考えると、一粒も無駄には出来ないはずで
私達は、これから、このお米、田んぼを守る
ために出来る事は何か、考えなくてはなりま
せん。今はまだ、直接農業に関わる事は出来
ませんが、環境問題について考え、出来る事
を実せんしていく事、美味しいお米を食べら

れる事への感謝を伝える事、田んぼの四季を
みんなに知ってもらうことは出来そうです。
私はこの美味しいお米が出来るまでのすばら
しい景色やにおい、音をみんなに感じてもら
いたいと思います。

こんなにお米が美味しい国に生まれて、私
はとても幸せです。世界中の人にも、日本の
の美味しいお米を知ってもらいたいです。ま
た今日も、美味しいお米に感謝を込めて、
っいただきます。